（様式第１号）

令和６年度　第２回総合教育会議　会議録

日　　時	令和６年１１月２８日（木）　１４：００～１４：４５
場　　所	市役所本庁　北館４階　教育委員会室
出　席　者	髙島市長　野村教育長 河盛教育委員　極楽地教育委員　三宅教育委員 （欠席）森川教育委員
司　　会	柏原企画部長
事　務　局	柏原企画部長、萩原教育部長、山本学校教育担当部長、伊藤市長公室長、 田嶋国際文化推進室長、田中政策推進課長、長岡管理課長、渡邊社会教育推進課長、 富田青少年育成課長、尾上学校教育課長、浅田学校支援課長、 濵田保健安全・特別支援教育課長、上原青少年愛護センター所長、 下條管理課長補佐、内野政策推進課係長、正好政策推進課員
会議の公開	■　公　開
傍 聴 者 数	０人

１　会議次第
（1）　開会式
（2）　議題１　「市民と市長・教育長の対話集会」（令和６年１０月開催分）について
（3）　その他

２　提出資料
（1）　資料　「市民と市長・教育長の対話集会」（令和６年１０月開催分）について

３　審議経過

（柏原企画部長）
ただいまより、令和６年度第２回総合教育会議を開催いたします。
はじめに、市長より開会のご挨拶をお願いします。

（髙島市長）
こんにちは。市長の髙島です。本日はご多忙の中、第２回総合教育会議にご出席いただきまして、ありがとうございます。
本日の議題は対話集会です。先月、教育長とともに「学び・文化」をテーマに対話集会を行いました。私がとても印象的だったのは、ご自身のお子さんが学校等に通っているかどうかに関わらず、市民の皆さんの教育に対する関心が非常に高かったということです。「学び・文化」というテーマではありましたが、ほとんどが「学び」の話でした。皆さんの学びに対する思いが強く、特に学校教育に対する思い入れやご関心がすごく強いのだと思いました。

もっと言うと、学校教育に対する期待が大きいことを感じました。
　せっかくの機会ですので、なぜ私が学校教育をここまで大事に思っているかについてお話したいと思います。その理由は大きく分けて２つあります。
　１つ目は、学校教育はこどもたちを育んでいく一番大きな受皿ということです。不登校のこどもたちもいる中、学校に来ることが全てではないですが、やはり学校はこどもたちの最大の受皿であることは揺るぎない事実であり、未来を担うこどもたちを育んでいくための非常に大事な場所です。だからこそ、教育大綱の中でも掲げている「自分と地球の未来を、探究と創造を通じて切り拓く市民」を育て目指していくための「ちょうどの学び」を、学校教育で実現したいという思いがあります。こどもに対する投資、未来世代に対する投資という点で、学校教育をすごく大事にしたいと思っています。
　もう１つの観点は、学校は地域の核であるということです。地域の中には、学校以外にも様々な公共施設がありますが、地域の区割りを公共施設の名称で行っているのは、おそらく学校だけです。校区という言い方はありますが、例えば集会所区とは言わないですし、病院院区という言い方もしません。しかも、校区というのはこどもが小学生でなくても使います。芦屋の場合は、コミスクという伝統的な活動がありますので、この観点をより強く感じるのかもしれませんが、「校区」という言葉が示すように、学校が地域の核となり、地域の様々な世代の方が学校の周りに集まるということは、とても大事な観点ではないかと思います。
　私もこの仕事に就く前、全国の学校を訪れましたが、やはり学校が元気だと地域も元気だと実感しました。学校に通っているこどもたちが生き生きと前向きに学んで暮らしていることが地域の活力に直結すると思いますし、学校の中でみんながどのように主体的に前向きに学び暮らしているかが地域に波及していくと思いました。
　今回の対話集会では「実は私、こういったことで学校に協力したいんです」という話をしてくださった方も多かったのですが、学校運営協議会も今年度から本格的にスタートしているなかで、地域の方々を学校にどう巻き込んでいくのかということはとても大事な観点ではないかと思います。これからも学校が地域の拠点であり、学校で生まれた主体性や主体的な取組が、地域にどんどん波及していくことを願い、今回の総合教育会議もいい議論ができればと思っています。どうぞよろしくお願いします。

（柏原企画部長）
　ありがとうございました。それでは、これより議題に入ります。
　本日の議題につきましては、「「市民と市長・教育長の対話集会」（令和６年１０月開催分）について」でございます。それでは、担当課より説明をお願いいたします。

（田中政策推進課長）
　政策推進課の田中でございます。よろしくお願いします。
　本日の議題について資料を基に説明をさせていただきます。配付資料の１ページをご覧ください。
　項番１には、「学び・文化」をテーマにした１０月の対話集会でいただいたご意見について、本日の総合教育会議にて意見交換をいただきたいという趣旨を記載しています。
　項番２には、対話集会の開催概要を記載しています。全４回の開催のうち、１０月２０日のオンラインでの開催分と、１０月３１日の上宮川文化センターでの開催分については、「学び」というテーマを考慮し、高校生相当の年齢以下のお子様がいる保護者を対象として開催いたしました。参加者数については、全４回で合計８６名の方にご参加をいただきました。
　対話集会でいただいた意見の概要は、項番３に記載をしています。こちらについては、管

理課長の長岡から説明いたします。

（長岡管理課長）
管理課の長岡でございます。よろしくお願いいたします。
項番３「「市民と市長・教育長の対話集会」における意見の概要」をご覧ください。全４回の対話集会における意見の概要をまとめたものです。
テーマである「学び」と「文化」で整理をしていますが、先ほど市長からもお話があったとおり、ほとんどが「学び」についてのご意見となっています。また今回は、高校生相当の年齢以下のお子様がいる保護者の方を対象とした回を２回実施しており、その回で出た意見については、○（まる）印をつけております。対話集会で出た意見の詳細については、後日ホームページに掲載する予定です。
本日は非常に時間も限られていますので、ご意見の中から３点に絞って意見交換をしていただきたいと考えています。
まず１点目が「就学前施設、小学校、中学校との連携」についてです。「進級した際、保育所では自由に自分を表現できていたのに、小学校では授業という枠があって窮屈で退屈だ」等のご意見がございました。各施設の接続をより円滑に行うことが課題となっているのではないかと思います。
２点目が「多様な環境・居場所づくり」です。本市ではのびのび学級や校内サポートルーム等を整備しているところですが、「子どもに応じた多様な環境や居場所づくりに今後も取り組んでほしい」というご意見がありました。
最後は「地域との連携」です。本市には様々なスキルをお持ちの市民の方々がおられます。その方々のご協力をいただきつつ、地域と学校との連携を進めていくことも今後一層必要ではないかということです。
以上３点を中心に、意見交換をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

（柏原企画部長）
説明が終わりました。意見交換いただく主な内容としては、１つ目が就学前施設と小中学校との連携、２つ目が子どもに応じた多様な環境・居場所づくり、３つ目が市民の方から何かできないかという多数のご意見をいただいたことから、ご協力をいただききつつ地域と学校との連携をどのように進めていくか、以上の３点でございます。
よろしくお願いいたします。

（髙島市長）
３つのテーマに入る前に、まず教育長は今回初めて対話集会に参加されてどうでしたか。

（野村教育長）
一番は、市民の方からご意見いただいたことについて、既に教育委員会でも取り組んでいることも多いのですが、市民の方がご存じでないケースが多く、周知や広報が足りていないと感じました。例えば、幼稚園と中学校・小学校が交流をしているとか、幼稚園でもいろいろな保育園や民間の方との交流はあるのですが、その発信が足りないがゆえのご意見もいろいろといただきました。

（髙島市長）
そうですね。３つのテーマに通ずることかもしれませんが、市が今何をやっているのか分

からないという声はよく聞かれますか。

（極楽地教育委員）
　確かに、行政の会議に入らせていただく前は、一市民の保護者として、もう少し見える化して欲しいとは思っていました。なかなか難しいですね。

（髙島市長）
　どのようなタイミングで、皆さんは現状を知るのでしょうか。我々は、「広報あしや」で紹介していますという話や、ウェブサイトで紹介していますという話をしがちですが、それでは届いていないことも多いですよね。

（極楽地教育委員）
　行政ということを考えず、民間や他の一般的なこととして考えた場合、やはり自分のタイミングで情報を見たいということが一番にあると思います。それはＳＮＳであったり、ホームページであったり、ＹｏｕＴｕｂｅであったりしますが、自分が興味関心のある情報を欲しいというのが、人の性だと思います。

（髙島市長）
　なるほど。市では最近、広報番組で「ＰＥＡＣＥプロジェクト」や「ＯＮＥ　ＳＴＥＰｐｅｒｓ」の取組を紹介しているのですが、これはどうでしょうか。

（極楽地教育委員）
　ＹｏｕＴｕｂｅなどで動画配信もされているので、すごくいいと思います。ただ、配信されていることを知らない方もいますので、口コミなどで、みんなで発信していくことが次のステップだと思います。

（髙島市長）
　本当ですね。

（三宅教育委員）
　学校のホームページでも、先生方が「こんな取組をしています」ということを発信されてはいるのですが、結局、自ら見に行かないといけませんし、興味がなければ見ないので、なかなか難しいですよね。私も一度対話集会を見学に行ったのですが、やはり参加されておられる市民の皆さんはすごく関心が高かったです。そういう方であれば、自分から情報を取りにいかれますが、そうでない方への周知は課題かと思います。

（極楽地教育委員）
　また、学校の情報配信であればミマモルメなどもありますが、配信が多過ぎると逆に見なくなってしまいます。デジタルデトックスをされている方も結構いらっしゃるので、そういう方向けにも、情報が要らない時には配信されないように、登録制などにして選択できるようにしてもいいのではと思います。自分からホームページを見に行く方や、情報が来るほうが良い方もいらっしゃるので、人それぞれでまた難しいですね。

（髙島市長）

今回、対話集会に参加された方ではオープンスクールのことを知らない人が多かったですよね。皆さんに知っていただきたいと思いました。

（野村教育長）
そうですね。周知が足りていないと感じました。また、幼稚園や就学前のお子さんを持つ保護者の方から「中学校ってどうなの？」という話があったのも印象的でした。もちろん小学生の保護者の方であれば中学校にご関心はあるのですが、就学前の保護者であっても同様なのだと実感しました。
学校に限って周知してしまうと、その学校の保護者の方だけが、知ることなってしまいます。広く知っていただくために、まさにオープンにするためにも、もう少し案内や周知の仕方は考えないといけません。「わくわく子育てアプリ」などは幼稚園や保育園の情報配信というイメージが強いですが、こうしたものも活用して、小中学校の情報をお知らせするということも、周知方法の１つのアイデアとしてあるのではないかと今回感じました。

（髙島市長）
授業参観であれば当事者の保護者しか行けないイメージがありますが、オープンスクールであれば誰でも参加可能ですものね。確かにそのことを知らない人は多いかもしれません。

（野村教育長）
オープンスクールに来ていただいて、生徒や児童が一生懸命自分たちで取り組んでいることを見ていただいたり、学校に対するイメージと実の姿が一致するといいますか、実際に見ていただくことが良いのではないかと思います。
もう１つ気づいたこととしては、「目指すビジョン」や「学びというものがどのように変わってきているか」ということが、対話を通して市民の皆さんに届いたことは良かったと感じましたが、「それらは現場に浸透しているのか」ということもありました。現場にどう広げ浸透させていくのかという点については、本当に地道に進めていくところですが、皆さんから期待をいただいているとすごく感じました。そういう意味でも、実際に皆さんに見ていただく機会がすごく大事ですね。

（髙島市長）
確かに、学校の授業がどう変わってきているかは、その授業を受けているお子さんは分かりますが、それ以外だと分からないですものね。まして、学校に通うお子さんがいらっしゃらない方々であれば知るよしもないですので、そういう方々にも、今、少しずつでも変わってきていることが伝わるといいですね。

（河盛教育委員）
芦屋では中学受験をするお子さんが非常に多いです。それ自体は別に否定することではないですが、小学校の保護者の間で、「公立中学がよくないから受験する」ということがかなり広まってしまっているんですよね。実際には、中学校が今どういう状況になっているかは皆さん知らないわけです。そのあたりをどうアピールするかですね。中学受験は問題ではありませんが、その学校に行きたいから中学受験をするのではなく、公立中学がよくないから受験するとなっているのがあまり好ましいことではないなと思います。

（髙島市長）

まさに、現状を知らなかったとおっしゃった保護者の方もいらっしゃいましたね。

（野村教育長）
そうですね。生徒会にしても、自分たちだけで異学年も巻き込んだ行事を考えるなど、本当に頑張っていろいろな取組をしているのですが、学校内でとどまってしまっています。

（髙島市長）
そうですね。それから、中学校のオープンスクールの告知をもっと低学年にもしてほしいという話もありましたね。今までは小学校４年生以上に、中学校のオープンスクールの話をしていますが、中学受験する子はもっと早くから考えるから、低学年からオープンスクールのことをちゃんと知らせてほしいというご意見をいただいて、確かにそうだなと思いました。

（野村教育長）
４年生がよく校区の中学校に行ったりすることがありますが、もう少し学年を落としてもいいのかもしれません。

（河盛教育委員）
中学受験する子は、受験する学校の文化祭などをよく見に行ったりしますよね。公立中学も地域の小学生に文化祭や運動会などを積極的に公開していけば、親しみにもつながるのではないかと思います。

（野村教育長）
例えば山手中学校では校舎の建替えに伴い、小学校の音楽会の代休に合わせて、その日をオープンスクールにしますから親子で来てくださいという形にしていたかと思います。他の２中学校でもそういった工夫などはありますか。

（山本学校教育担当部長）
オープンスクールの期間を、１日・２日ではなく、１週間設けている学校が多いと思います。その期間を調整して、代休日と重ねるといった取組も行われています。
また、今、芦屋では幼稚園と小学校、もしくは小学校と中学校の連携に加えて、幼稚園と中学校の連携にも取り組んでいます。西山幼稚園は、昨年中学校を訪問しているのですが、子どもたちからは「この中学校を目指したい」という発言があったということも聞いており、努力の結果ではないかと思っています。また、今年度も中学校の校長先生自らが生徒を連れて宮川幼稚園を訪問したということがあり、その様子が宮川幼稚園のホームページにも掲載されていて、広報にも繋がっているのではないかと思います。こういった、中学校が頑張って取り組んでいる様子は最近よく見られます。

（河盛教育委員）
芦屋市では、幼稚園に通うお子さんは少数派になっています。保育所やこども園に通う子が多い現状がありますので、就学前施設との連携であれば、保育所やこども園とも連携する必要があるのではないでしょうか。

（髙島市長）
最近は、こども園や保育所との連携も徐々に進んでいるという話も耳にしますが、これに

ついてはどうですか。

（野村教育長）
　把握している取組としては、教員の研修や公開保育などは、呼びかけ合い連携して行っています。子ども同士であれば、園単位で近隣の私立園などにも呼びかけて交流しています。園庭が小さい園もありますので、公立幼稚園に来ていただいて一緒に遊ぶという形です。

（髙島市長）
　保育所やこども園が小学校と連携している例などはありますか。

（濵田保健安全・特別支援教育課長）
　「小学校ごっこ」では、小学校に幼稚園や保育所のお子さんを呼んで、職員が講師となって字を書く練習をしてみたり、学校を体験していただいたりということはよく行っています。他にも潮見幼稚園では小学校が隣ですので、週に１回、休み時間に扉をあけて、１年生と交流することは継続して行っています。
　また、「なかよし運動会」という、その校区の１年生と近隣の幼稚園・保育園が一緒になってかけっこなどをするミニ運動会のようなものも行っています。こうした連携の中で、小学校でも１年生の「できる感」といいますか、１年生の自主的な成長を再認識・実感しているようです。保幼小の連絡会でも、講師の方が保幼小の連携について「自分たちで具体的な内容を決めてみてはどうか」と働きかけた際には、熱心に話し合っておりましたので、そういった時間やきっかけさえあればどんどん連携に向けて動いていくのではないかという実感はあります。

（髙島市長）
　小学校の先生が、幼稚園、保育所やこども園の先生方とお互いに連携を深めて、こどもたちの可能性について新たな発見があったというお話はすごくいいですね。やはり、１年生になった瞬間に「学校」という型にがらりと置き換わってしまうと、こどもたちはびっくりしますし、それに合うか合わないかということも絶対にあると思います。こどもたちの主体性や、こどもたちの素直な学びに対する姿勢を引き出せるように連携が取れるといいですね。

（野村教育長）
　そうですね。

（髙島市長）
　対話集会の中でも、園児が小学生になった瞬間に世界が変わってしまうので、それに合わない子はどうしてもいるという中で、一人ひとりに合った「ちょうどの学び」のサポートを、どうすれば実現できるのかという話もありました。教育長はどのようにお考えですか。

（野村教育長）
　統計上、不登校の子どもの数が一番多いのが小学校２年生で、だんだんと減少するという結果がでています。就学前にどれだけ自分の主体性を発揮した子どもたちでも、規律のようなピシッとしたところが壁になり、２年生でその反動が来ているのかもしれません。そういう意味では、学校の中でいかに主体性を大事にする環境を緩やかに提供するかが大事だと思っています。だんだんと歳を重ねていくと言いますか、「６歳になったんだからきちんとしな

さい」「１年生でしょ、昨年の１年生はもっと出来ていたよ」ということなどを言うのではなく、最初は畳やじゅうたんの上で授業が始まり、だんだんと椅子に座っていくような、なだらかなグラデーションのような環境設定が大事だと感じています。一人ひとりに合った学びということを考えたら、一律に仕切ってしまうのは危険です。「あれをやりたい、これをやりたい」という子どもに、いきなり「時間になったから手はお膝です」などと言うことについては、そうしたことが大事な場面ももちろんあるのですが、そこを少しなだらかに接続していかなければいけないと感じたところです。

（河盛教育委員）
　小学校で不登校やいじめの対象になったりするこどもは、軽度発達障がいの子も多いのです。明らかに発達障がいではなく、いわゆるグレーゾーンのお子さんです。５歳児健診では主に発達の検査をすることになっていますが、芦屋市の場合は希望者だけが健診を受けるというシステムになっていますので、保育士さんなどから軽度発達障がいかもしれないと聞いておられても、該当者ほど、診断を受けたくないからと健診を控えていることがあるようです。決してその子たちを特別扱いすべきだということではなく、特性に合った育て方や手法がありますので、５歳児健診を受けられる方を増やす実施の仕方を検討されるのがいいのではないかと思います。

（髙島市長）
　５歳児健診を必須とした方がうまくいっているという事例はあるのでしょうか。

（河盛教育委員）
　国は全員健診を受けるべきだと言っていますが、実際に行っている自治体はあまりないようです。発達を正確に診断できる医師自体がいないというのも正直なところかと思います。大まかには診断できたとしても、それは専門性がないものですので、健診の対象人数が多くなると実施が難しいということではないかと思います。ただ、保健師と面談するだけでも、ある程度の把握はできますので、そういう取組を広げられればいいのではないでしょうか。

（髙島市長）
　この話はインクルーシブの話とも繋がりますね。対話集会でもインクルーシブの話は結構出たのですが、例えばグレーゾーンの子だと認識できた場合に、学校側はそれによって何か対応を変えたり、合わせたりということが必要でしょうか。

（河盛教育委員）
　ある程度は必要だと思います。叱り方や注意の仕方などもいろいろあります。うまく特性を捉えられれば、発達障がいであっても何ら問題なくやっていけるというケースも多いですが、実際問題として、担任の先生と合わないということが不登校の理由になっているケースも結構多いです。先生から叱られても全然問題ないお子さんもいるのでしょうが、ちょっと怒られただけでも堪えてしまうお子さんもいます。

（浅田学校支援課長）
　現在、学校では校内サポートルームにＰＥＡＣＥサポーターを派遣し、それぞれのお子さんが安心していられる場所をつくろうとしていますが、やはり子どもたちの中では、過敏な子や、自分は怒られていなくても周りの子が怒られている時に過度な緊張を感じてしまうと

いう子も多く、それに対する先生方の理解を進めていく上でも、様々な支援やフォローの実践を共有することが大事です。「苦しい時もあったけれど、最終的にこちらのフォローもあってこどもたちが安心安全な学校生活を送れるようになった」ことを、担当者会などで地道に共有・発信をしていきながら進めたいと思っています。その一端を担うのがまさにＰＥＡＣＥサポーターであり、様々な実践が作れそうだと期待しているところです。

（髙島市長）
　３つ目のテーマである地域との連携についてお話したいのですが、対話集会でも「私も学校やこどものために何かしたいと思っています、登録もしました」という方が結構いらっしゃいました。まさに地域にいらっしゃる教育委員の皆さんは、いろんなお声を聞かれていると思うのですが、もっとこういうふうにした方がいいとか、ここは言っておきたいといったことはありますか。

（三宅教育委員）
　私は学校の中を見学させてもらったことがあるのですが、多文化に関しては既に地域と連携できていると感じました。きっちりと市民の方が入られて、フォローもついていたんです。ただ一方では、外国人にはそういったフォローがあるのに、生きづらさを感じている日本人の子たちにはそのフォローがなかったりします。私が見学に行ったうちぶんでの対話集会では、「私は登録しています。給食の時間は先生方も忙しいから、そこは私が市民としてサポートできますよ。」というお話をされていた方もいらっしゃいましたので、そういった方がうまく学校に入っていって、出来ることをしていただけたらいいなと思いました。

（髙島市長）
　多文化共存のところでは結構うまくいっていると感じられたということでしょうか。

（三宅教育委員）
　見た感じではうまくいっていると感じました。

（極楽地教育委員）
　私が常日頃思っていることとして、少し抽象的ですが、「彰往考来」という「過去を明らかにして未来を考える」というものがあります。佐藤前副市長から教えていただいた言葉なのですが、物事には伝統や歴史、革新があり、今皆さんが「こうしたい」と思っているものは新しく興味や関心があってのことと思うのですが、これまでのやり方でやってこられた方々もたくさんいらっしゃいますので、その方を置き去りにしたり、ないがしろにしたりしないことが私は大事だと思っています。それを丁寧に進めないと、分断や軋轢が起きてしまいます。そのあたりがうまく調和するように、行政や私たちみんながコーディネーターとなり、キーマンとして、緩衝材として皆さんをまとめるという意識が必要だと思っています。例えば、学校行事などをお手伝いする学校サポーターなどについても、今までにも学校支援ボランティア連絡会というものが既にありました。それを知らないということが問題だと思っていまして、教育長がおっしゃったような周知面での課題だと思いますが、うまく今ある組織や人材を把握した上で、それを生かすか、形を変えるかということを検討すべきではないかと思います。

（髙島市長）

既にいろんなことをしてくださっている方々が、芦屋にもたくさんいらっしゃると思います。言い方が難しいですが、目立つ訳ではないけれど、長い間やってくださっている方がいらっしゃいます。そうした方々に支えられている部分はとても大きいと思うのですが、そこに「自分も手伝いたいな」と思った人たちがうまく入っていくには、どうするのがいいのでしょうか。

（極楽地教育委員）
それこそ対話しかないのだと思います。対話というのは、信頼の上に成り立つものだと思いますので、それは一朝一夕ではなく、常日頃からコミュニケーションを図り、挨拶をしたり、お話をしたり、顔を合わせたりということが大事ではないかと思います。まずそこをクリアしないと相手に受け入れてもらえず、対話にまで繋がらないというのも人の性ですね。

（髙島市長）
本当ですね。

（極楽地教育委員）
そこが難しいところですけど、お互いに認め合う「自由の相互承認」、つまり来られた方をみんながウェルカムで受け入れるというスタイルが、多文化のほうではおそらく出来上がっているのだと思います。日本人にとっては、それはあまり得意ではなく、新しい方を拒んでしまう気持ちも分かりますので難しいなとも思いますが。

（髙島市長）
学校をよくしたいという思いは皆さん一緒ですものね。

（極楽地教育委員）
そんな皆さんをコーディネートし、まとめて、「一緒にやりましょう」ということが大事だと思います。私も頑張ります。

（河盛教育委員）
多くの地域の方で学校を支えるといった場合に、大多数の方は善意でやられるとは思いますが、中には本人としては善意だけど例えば特定の政治信条を持っている方とか、あるいは何かの事業の利益に結びつくような目的でやろうとする方も交じってくる可能性がありますので、そのあたりをいかにコントロールできるかが課題だと思います。

（極楽地教育委員）
河盛教育委員がおっしゃったことを私もすごく感じていまして、やはり今ある組織は、コンプライアンスや個人情報保護、セキュリティをクリアして体制が出来上がっているものですので、地域との連携を深めていく中でもリスク管理は大事かと思います。
本当にみんながお互いさま、おかげさまで、お互いのことを尊重し合う芦屋になってほしいと思います。

（河盛教育委員）
中学校部活動の地域移行でも、こどもに応じた多様な環境・居場所づくりに結び付く可能性が大きく、それをきっかけにこどもたちと地域が結びつくという可能性があると思います。

日本の中学校では部活をするのが当たり前のようになっていますが、世界を見るとそんなことはありません。これは日本だけの話です。
　地域移行が始まってすぐは、不安に思う方も多いと思いますが、おそらく３、４年経てばむしろそれが当たり前になっているのではないでしょうか。地域移行によって、学校と地域の関係性が大きく変わるきっかけになるのではないかと思います。

（柏原企画部長）
　様々なご意見が出ましたが、時間も近づいて参りました。議題の締めくくりとして市長よりお一言お願いいたします。

（髙島市長）
　今、芦屋の中で、教育に対する興味関心が今までに増して高まってきていると思いますし、だからこそいろんな人が「私も何かできないかな」と考えてくだっており、とてもいいことだと思います。でもその中で忘れてはいけないのは、先ほど極楽地教育委員がおっしゃったとおり、見えにくかったかもしれないけど、これまでの間ずっとやってこられた人たちに支えられて今があるのだということを、みんなで再認識する必要があると感じました。
　本当に皆さん学校現場を良くしたい、こどもたちのために何かしたいという思いをもっていらっしゃいますので、その中で、どういう役割分担でやるのか、どれだけお互いがおかげさま・お互いさまと思いやりながらできるかということが大事だと思います。まさに総合教育会議というのもひとつの場ですけれども、これ以外にもいろいろなタイミングで、教育委員会と市長部局とで対話しながら一緒に取り組んでいきたいと思いますので、今後ともよろしくお願いします。

（柏原企画部長）
　ありがとうございました。本日予定されていた議題は以上となります。
　次第項番３の「その他」でございますが、事務局から特にご報告はございません。それでは最後に、教育長からご挨拶をお願いいたします。

（野村教育長）
　本日はありがとうございました。教育委員会では、ちょうど１年前に新しく立ち上げたＰＥＡＣＥプロジェクトで、「安心」をベースにし、「対話」を大切にして取組を進めているところですが、特に「安心」というものはどの子にも、どの人にも当てはまっていくものだなとお話を聞いて感じていました。それを生み出すのが、なだらかで、緩やかで、円滑な接続や連携です。それは学校間だけではなく、幼稚園と学校もそうですし、学校と地域もそうです。そして、市長と私たち教育委員会もそうですし、市長部局と教育委員会等の各課同士もそうです。「安心」をベースにしたなだらかで緩やかなつながりが、新しいものを作り出していくことにつながるのではないかと感じました。
　本日、私は環境の話に触れましたが、特にここはこだわったほうがいいと思っていまして、これは「安心」ベースの環境、「対話」がしやすい環境という意味ですが、そういったものをこれからもしっかりと発信していきたいと思っています。実際、学校園に対しては、言葉で言うのではなく、イメージしやすい画像で示しながら、「ある学校ではこんなふうにしていましたよ」といった紹介をしながら進めており、緩やかですが、環境づくりにつながるように努めているところです。お話にもありましたが、多様な人に触れるというのはすごく大事なことですので、これまで支えてくださった方、それからこれから出会う方と一緒になって、

こどもを真ん中にしていい環境を作っていけたらと思っています。今後とも皆さんどうぞよろしくお願いいたします。本日はありがとうございました。

（髙島市長）
　現在、総合計画の後期計画を策定しているところですが、今回から教育振興基本計画も総合計画の中に位置づけます。「教育」を一番上の計画に位置付けてやっていくということで、教育委員会もそうですが、我々市長部局も一緒になってしっかりやっていきたいと思いますので、引き続きよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

（柏原企画部長）
　ありがとうございました。
　本日の会議録でございますが、作成次第、その内容を各委員に御確認いただきますので、引き続きどうぞよろしくお願いいたします。
　以上をもちまして、本日の会議を閉会といたします。お疲れさまでした。